



長谷寺かわら版

百日紅

93号

2015 (平成27) 年
11月1日

毘沙門堂修復

☆毘沙門堂

長谷寺は、撫養街道という東西に走る古い街道の、北側に面しています。この撫養街道は伊予に通じる、いわば阿波の主要街道でした。

街道から短い参道を登ると、正面に巨大なイチョウが立ちほだかり、その向こうに本堂があります。その東側、



ふたつのお堂の間から、屋根の先端だけが見えます。

だから向かって右に観音堂、左に庫裏があります。

本堂と観音堂の間から、お堂の屋根の先端が見えます。

これが毘沙門堂です。しかし、ちよっと目立たない場所に建っているのです、入ったところがないどころか、存在さえ知らない檀家さんも少なくありません。

☆再建プロジェクト

毘沙門堂はもともと、江戸時代に三重塔として計画されたものでした。しかもそれは、以前に建っていた塔の再建計画でした。かつての長谷寺は、塔をもつ寺だったわけです。

これが失われたのは、戦国時代。土佐の戦国大名長宗我

部氏の阿波侵攻によってでした。しかしそれがどんな形で、どれだけの高さの塔だったのかを語る史料は残っていません。

ただ、この再建の許可を藩に願ひ出た文書に「三間四面之宝塔」とあるのみです。

「宝塔」ですから、高野山の根本大塔のような、いわゆる多宝塔と呼ばれる形式の塔だったのかもしれませんが。

この再建プロジェクトが開始したのは文政年間。いまから200年ほど前のことです。塔の焼失からもやはり200年以上が経っていました。

藩の許可を得て再建計画は始動したものの、資金繰



改修工事が終わった毘沙門堂



こちらが本尊の毘沙門天

りには随分苦勞したようで、一層部分ができたまでに、なんと30年もかかりました。これが安政4年(1857年)。ペリー来航の4年後のことです。すでに幕末維新の混乱期が始まっていました。

しかし、維新後の明治新政府による神仏分離政策で、寺の土地・建物の少なからぬ部分は、隣の金毘羅神社の所有となり、もう塔の建設どころではなくなくなってしまい、結局、一層部分のみで工事はストップしてしまいました。

ところで、寺の塔は釈迦の墓です。ですから、塔の内部に釈迦以外の仏をまつることとは、本来はあり得ません。しかしここには毘沙門天が安置され、いまは毘沙門堂と呼ばれています。どういうわけ

でここに毘沙門天が安置されたのか、たしかなことは伝わっていません。

毘沙門天は、四天王のうち北方を守る武神、多聞天の別名ですが、財を授ける神としても信仰を集めています。資金集めに苦勞した当時の住職が、塔が完成するまでの仮の本尊としてまつり、資金が集まることを祈ったのではないかなどと考えるのは、罰当たりでしょうか。

☆改修工事

昨2014年、四国が幾度かの巨大な台風に見舞われたのは記憶に新しいところです。中でも、盆経の最中に四国に上陸した11号は、寺の内外に大きな爪痕を残しました。恒例の地元を挙げての行事である観音おどりさえ、嵐を避けて本堂でやったほどです。

この台風で、毘沙門堂の瓦が落ち、お堂の部材も一部壊されました。実はこの瓦は、以前から少しずつずれ、また



濡れ縁を下から覗くと、このありさま。

果、思い切って改修工事に着手することにしました。毘沙門堂では、節分の恒例行事で護摩を焚いています。これを終えた2月半ばから工事が始まりました。

雨樋がありません。屋根からの雨水は、周囲を囲む雨落溝で受ける構造です。この溝も石が傾き、放つてはおけません。毎月護摩を焚いているのに、天井には排気口も換気扇もありません。電気も、古い配線のまま、漏電の心配があります。



右下が仁王門。これをくぐると石段。右上が毘沙門堂で、石段の側を向いて建っています。

染みの寺の構えです。かつての長谷寺も同じように、仁王門から続く石段の両側に、石段を向いて諸堂が並んでいたことでしょう。そして登りつめたところに、本尊のおわす本堂がありました。

落ちるものもあり、気にはなっていたところでした。

何とかしなければならぬ

と思っていた矢先の出来事でしたから、大急ぎで大工さんと瓦屋さんに見てもらったところ、瓦は全体が大幅にず

ろが次々と見つかりました。屋根を支える垂木の幾本かは折れ、瓦を乗せる野地板も腐っていました。堂の三方を囲む濡れ縁は、板の下に楔を打って、なんとか崩壊を免れているらしいことも判明。

この際だから、気になる部分はすべて手を入れてもらうことにしました。☆仲間はすれ

冒頭に書きましたように、長谷寺ほどの建物も南面しています。街道の方を向いているわけですね。

そこに建つ仁王門も、本堂に至る石段までも、同じ運命をたどりました。仁王門が長谷寺の正門ではなく、石段が寺のメインストリートではなくなってしまうわけです。

寺の堂舎の屋根には、その

ところがこの毘沙門堂だけ

寺の正門といえは仁王門に

その後、山の中腹にあった

す。むろん台風のせいだけでなく、長い年月の仕業でもあります。放っておいたら、雨

漏りで建物全体が傷み、大修理をせざるをえなくなる。いまのうちになら、少しの手直し

と異質な建物というか、仲間外れという印象さえあります。ここに行くには、観音堂の東側の段を登って、一旦境内地の外に出て、隣の金毘羅

寺にも仁王門がありました。仁王門をもつ寺は、近隣にはありません。昔の長谷寺は、けっこう格の高い寺だったことがわかります。

諸堂は移築され、現在の構えになります。

と瓦の葺き替えて済むのではないかと

うからでしょうか、基本的に

は、東を向いていて、ちよつと異なる建物というか、仲間外れという印象さえあります。

仁王門をくぐると、本堂に至る参道があり、それを挟んで左右に、参道側に向かって

諸堂が並ぶというのが、お馴染みの寺の構えです。

断の結果でした。

ずれて傾いた、水落溝の石

に回り込んで、堂の段を登る

諸堂が並ぶというのが、お馴染みの寺の構えです。

と、東を向いているわけです。

総代会に諮って検討した結

ずれて傾いた、水落溝の石

に回り込んで、堂の段を登る

諸堂が並ぶというのが、お馴染みの寺の構えです。

と、東を向いているわけです。

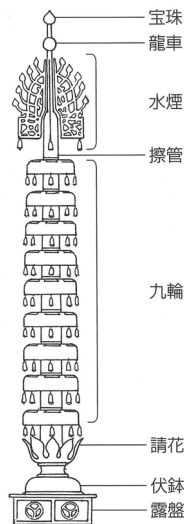


ずれて傾いた、水落溝の石

☆相輪

というわけで、いまや毘沙

門堂と呼ばれるお堂に過ぎませんが、計画通りの完成はみなかったものの、あくまで塔として建てられたものです。



ご承知のように、仏塔は釈迦の遺骨を納めた墓で、もともとインドでは半球の形をしています。

仏教が東方に伝わり、中国を経て日本に至るまでに、この形は、五重塔や三重塔のように、複数の層を重ねる塔に形を変えました。しかし、本来のインドの塔の名残りを残

している部分があります。

塔の屋根の上にそそり立つ

のは、相輪と呼ばれる、塔には欠かせない装飾です。右図のように、最下部の露盤から最上部の宝珠まで、8つのパーツでできています。この露盤の上の「伏鉢」と呼ばれる部分こそ、インドの塔の形である半球の名残です。

わが一層の塔の相輪は、九輪や水煙といったパーツは略されているものの、上の写真のように、宝珠・請花・伏鉢・露盤は備えています。

再建計画の段階では、フル装備の相輪が立てられるはずだったことが、堂内に今も残る模型によって分かります。しかし一層だけの塔では、高い相輪はあまりにアンバランスです。やむなく間の九輪な



毘沙門堂の略式の相輪。かつては鉄製でしたが、瓦で新しく作り直しました。

どを省いた略式のものにしたのでしよう。

加えて、先端にあるのがたとえ略式の相輪でも、これはあくまで塔なのだ、当時の住職は主張しなかったのでしょう。

☆塔は柱

ところで、塔は釈迦の墓だと書きました。

一方、日本では古来から柱に対する信仰がありました。諏訪大社の勇壮な御柱祭は有名ですね。柱は天と地を結ぶものであり、また神がそれをつたって地上に降りてくると信じられました。神を「一柱」「二柱」と数えるのはここから来ているとも言われます。柱は神の依代、いわば

邪魔で仕方がない。しかし、真ん中にはありません。部屋

御神体だったわけです。

ここに仏教が伝来し、仏塔が建てられるようになり古来からの柱に対する信仰を前提とし、これと結びつくことにより生み出されたものでした。

仏塔の中心には柱が立っており、その柱を支える礎石に穴を穿ち、ここに仏舍利を納めました。釈迦の墓であり、柱は神でもあるという、ふたつの性格を合わせ持った、日本独特の仏塔です。

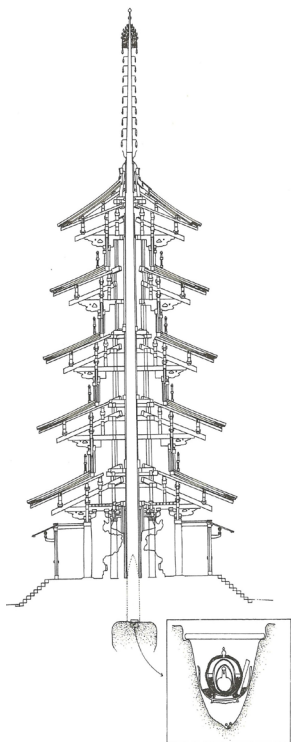
ふつう柱は、屋根を支えるものではあっても、建物のど



日本一高い仏塔とされる京都東寺の五重塔も、中心は柱です。左上の図は、木造では古の法隆寺の五重塔。その断面図を見ると、屋根や壁は、柱を包む鞘、もしくは柱の周囲を覆う装飾のようにも見えます。

うちの塔は三重ですが、中心に柱はありません。ちよつと特殊ですね。

中心に柱がないのは、右の高野山の根本大塔と同じです。この様式は多宝塔と呼ばれると、かなり変わった、というよりむしろ、異様ともいえる形をしていますね。巨大な卵の下半分を建物で囲い、



法隆寺五重塔。柱の下には穴が穿たれ、仏舍利の入った壺が納められています。

さらにそれに屋根を被せたように見えます。白い部分は「亀腹」と呼ばれます。

多宝塔は、伏鉢という形で、屋根の上の相輪の一部に矮小化されてしまった本来の釈迦の墓の半球を、亀腹で大胆に復活させ、伝統的な日本の塔と合体させたもので、空海が密教の教えをもとに創作したのではないかとする、いとも魅力的な説が、建築の専門家から提示されています。この形は空海の発明だというわけ

です。そしてこの根本大塔の中心は、もはや柱ではなく、密教の主尊たる大日如来が安置されました。

☆長谷寺宝塔
わが三重塔も中心は柱ではなく、その意味では構造はむしろ多宝塔に近いです。かつてあったという「宝塔」が多宝塔だったという可能性は、ここにもあります。

残念ながら本尊は、いまま

毘沙門天のまま、堂の奥に東を向いて安置されています。そして本尊が置かれるべき堂の中心には護摩壇

が、あたかもこれこそ本尊であるかのように置かれています。しかしその護摩壇のさらに下。堂の中央の床下には大きな穴が穿たれ、仏の舍利が納められています。

ただ、舍利といっても釈迦の遺骨ではなく、釈迦の遺した教え、お経ですね。経は「法舍利」ともいいます。梵字のお経が石に書かれた「経石」がお堂の中心の地下に、

大量に納められているわけです。毘沙門堂は実は塔に他ならないとするもうひとつの根拠がここにあります。

そうだとすれば、毘沙門堂ではなく毘沙門塔とも呼ぶべきでしょう。というより、



梵字の経が書かれた経石

塔に名前など不要ですね。塔は塔です。長谷寺宝塔とも呼びたいところです。

むろん長く毘沙門堂と呼んできたものですから、いまさら呼び名は変わらないでしょうけれど。

半年をかけた改修工事は、お盆の頃に竣工し、9月3日に、ささやかな落慶法要を兼ねて、お休みしていた護摩祈

禱を再開しました。なお今回の修理に際し、外回りが見事に修復されたのだから、内部の荘厳も新しくしなくちゃと、篤志の方々が、幕と打敷(写真下部に見え

る3枚の敷物)を奉納して下さいました。打敷は、金欄地と裏地を手に入れて縫って下さった、まさに手作りです。

また堂内には、わけあって、仏さんがお留守のままの厨子がありました。今回の修復を絶好の仏縁と考え、昨年世界



右にあるのが、塔の模型。左の厨子に新しい仲間がお住まいです。



毘沙門堂の新しい仲間たち

まして無事終了しました。なお、篤志の方々のお名前は、堂内に掲示いたします。毘沙門堂では8月を除いて、毎月3日午前10時から護摩を焚いています。まだ毘沙門堂にお参りしたことのない方、ぜひ一度お運びください。



◆カンパと切手

天野大、濱武捷、福井幹代、前川和世、米本茂雄の各氏からカンパ、井上裕子、熊谷猛、蛭間利平の各氏から切手が届きました。ありがとうございます。敬称略です。

彫られたあまたの仏像の中から、3体の作品を譲っていただきました。毘沙門天と脇を固める仁王尊です。まるで誂えたように、厨子にピッタリと納まりました。こうして、間違いなく今年最大のイベントだった、毘沙門堂改修工事も、お蔭をもち

〒772-0004
 鳴門市撫養町木津 1037-1
 電話 088-686-2450
 ファクス 088-686-2130
 E-Mail cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
 URL http://www.chokokuji.jp/

新刊 長谷寺
 編集 雑信